

まえがき

Islam is rising

The Christians mobilising

(Matt Johnson, "Armageddon Days Are Here," 1989)

本書の問題意識は、明白である。

かつて、中東・イスラーム世界における西欧植民地主義、あるいは西欧型価値意識にもとづく国際的平準化——最近はグローバリズムという名の——に対する抵抗運動は、民族主義／ナショナリズムにもとづく固有性の主張を軸に、専ら展開した。それが1970年代後半から1980年代前半にかけて、多くの抵抗運動はイスラームを基軸としたものとして展開されるようになった。ここにイスラーム復興主義という現象への名付けがなされ、ナショナリズムの衰退とイスラーム主義の台頭が指摘されるようになった。

アラブ民族主義全盛期のアラブ民族主義研究書の多くは、19世紀のイスラームにもとづく反植民地運動・近代化運動を、その後のアラブ民族主義の発展の緒点として位置づけていた。それは、ある意味でこれらの諸運動を、「イスラームから世俗近代思想へ」という到達方向を前提としたベクトルのうえに置くことであった。しかし現在は、世俗近代思想潮流のなかに捨象されたイスラーム運動のさまざまな側面を掘り返し、復権させる方向にある。その意味では、ある種単線の近代化論とも相通じるアラブ民族主義思想中心のこれまでの知的体系が、イスラームの復興によって複線化され、西欧近代が相対化されてきている、とも言えよう。

問題は、何故、中東において社会の主流なアイデンティティであり、かつ最も大きな社会的動員力を誇る政治的イデオロギーであったアラブ民族主義

が衰退し、それに代わってイスラームがその地位を占めるようになったのか、という点である。問いは、「何故」であり、「何時」であり、「いかなる環境のもとでか」である。

この問いに答えることは簡単ではないばかりか、回答を求めるがゆえに単純化してはならない事例が多々存在する。しかしながら、ある程度の仮説を想定することは不可能ではないだろう。ナショナリズムという概念自体が幅広い解釈の余地を残すものであり、イスラーム、ひいては宗教全般との一般的な関係について、印象画程度のものであるとはいえ、描いてみることは重要であろう。たとえば、発生している事象が民族主義にもとづく行動なのか宗教意識にもとづくものなのか、その違いを明らかにすることで、それによって取り結ばれている社会集団の範囲既定が異なってくる。その事象の広がりや、どこまで、何にもとづいて拡大、あるいは縮小するのか。また、国家領域における越境・分裂といった事象の裏に、いかなる思想的根拠を見いだすかによって、事象の解釈が変わってこよう。民族主義にもとづく国家体制が常に世俗権力への忠誠を要求するのに対して、宗教意識にもとづく社会集団においては、忠誠の核をどこに設定するかは微妙な問題となり、動員能力のありようが世俗思想のそれとは異なった様相を呈する。

こうした問題群を扱うために、民族主義とイスラーム復興の分岐点、あるいは相互関係がある程度明らかにしておくことは必要であろう、と編者は考えている。

さらに視角を広げていえば、本書が遠く射程に入れているのは「個」と社会の関係であり、「個」のアイデンティティの措定のしかた／されかたの問題である。そしてその措定されたアイデンティティが、いかなる経緯を経て社会的紐帯の核に結晶化していき、さらには共同体形成論理としてイデオロギー化されていくのか、という問題である。編者は、前作『国家・部族・アイデンティティ』(1993年)のなかで、この前段の問題意識にもとづき、中東・アラブ社会において固有の伝統的社会的紐帯意識がいかなる形で政治

化していくかを、主として国家形成期における国家と部族の關係のなかで捉えようとした。今回の試みは、後段の問題意識、すなわち共同体形成論理としての民族主義思想を、イスラームという異なる共同体形成論理と対照しながら批判的に検討していくことにある。あるいは、そもそもそれらが「異なる」のかというところから始めなければならないかもしれない。

宗教意識にせよ、民族主義にせよ、共同体の紐帯意識の核となるイデオロギーは、それがために人が自分以外のもののために命を投げ出すことをも厭わないほどに、人を動かすことがある。そこまで強力な、しかも経済的要因というよりはむしろ精神的・抽象的な要素の強い「何か」とは、いったい何故生まれるのであろうか。何を必要として、そうしたイデオロギーを人は作り上げるのだろうか。そこでは、宗教や民族意識などの社会的紐帯意識を自然発生的、本質論的なものとして前提化するのではなく、共同体を維持するための論理として社会的に「想像／創造」されたものだ、とみなす視角が重要である。

その一方で、民族や宗教にもとづくアイデンティティは、自ら望んで選び取ったものではなく、一定の天賦性を帯びたものとして規定される場合が多い。西欧近代の歴史が「個」の確立にともなって発展してきたものであるとすれば、ある意味で「個」がその天賦性の柵からいかに抜け出すかの歴史でもあったといえよう。身分制を解体し血縁社会から脱却することを「文明化＝発展」の過程と位置づけるなかで、近代西欧は「個」の集合体を共同体に化する溶媒として「ネーション」というものを編み出したわけであるが、その「ネーション」にある一定の天賦性が付きまとう——「ネーション」を確立するうえで、擬制としてあれ、その「永続性」を仮定せざるをえない——のは、何故なのか。

「ネーション」、あるいは「ナショナリズム」という言葉がもつ多義性については、ナショナリズム論における中心的論題であり、訳出することなく「ナショナリズム」それ自体を分析概念として使用することが多いが、ここであえて「民族主義」と訳出しているのは、この「天賦性」との関連におい

てである。中東における「ナショナリズム」を議論する場合、国家形成論理が機能する場としての「ネーション」と、民族解放・民族独立を掲げるときに措定される「守られるべき共同体」としての「ネーション」とがしばしば乖離しており、とくにアラブ世界において、前者が「ワタニーヤ」という言葉で表され——日本語にすれば「国民主義」ないし「祖国主義」といった形で訳され、後者が「カウミーヤ」という言葉で表され——日本語にすれば「民族主義」と訳されるということは、よく知られたことである。本書が主として取り上げているのは、後者——その多くの論者が天賦性をより強く打ち出した——の側面である。これを「民族主義」と訳出することは、こうしたアラブ社会において確立された「ナショナリズム」が、「誰をネーションの構成員とするか」という出発点から問題を孕んでいることを踏まえて、かつ、その「ネーション」規定に言語的要因や系譜的要因といった要因を強調した思潮が主流であったことを踏まえてのことである。

ところで、「個」が、それが成し遂げたものによって評価されるのではなく、それが「生まれ持ったもの」によって評価され社会への参入を左右されるとき、「個」の「社会」=「評価を下す側」に対する働きかけのベクトルは、二方向あると考えられよう。第1のベクトルは、「生まれ持ったもの」を否定するか最小にして、あくまでも「個」としてなにが成し遂げられるかに全力を尽くす。その場合、ものごとを「成し遂げる」ということは、評価を下す社会の持つコードに即した行動と意識のあり方を習得するということにもなる。第2のベクトルは、「生まれ持ったもの」であることを全面に押し出し、それが否定的な評価をもたらしているのだとすればその評価を肯定的なものに変えるよう、「社会」=評価を下す側に働きかける。換言すれば、前者は「普遍」世界のなかに参加して、そこに「個」のアイデンティティの発露の場をみる姿勢であり、後者は自らの所属する社会の「ネーション」性などの「固有性」にアイデンティティの拠り所をみる姿勢である。

ナショナリズムをめぐる、「普遍主義」対「固有性」という議論は、こ

れまでも繰り返しなされてきた。しかしここに「宗教」、とりわけ世界宗教が関与してくると、事態はそう単純ではない。「世界宗教」の枠組みを以って既存の「普遍」性に意義申し立てをするということは、評価を下す側のみ「普遍」があるのではないという、いわばきわめて常識的な事実を指摘することでもある。

そこで問題は、いまイスラーム世界において起こっていることは、そういうことなのであろうか、ということである。世界観を「西欧近代」から奪い返そうとする「普遍」対「普遍」の対立——言い換えれば「文明」の衝突なのか。それとも「普遍」に対するイスラーム世界がもつさまざまな「固有性」の反発の、新たな様式なのか。そもそもイスラーム世界において、近代以降、いかなる共同体論理を以て人々は自らを繋ぎとめようとし、あるいは繋ぎとめられてきたのであろうか。

こうした問題の設定はあまりにも遠大であり、一冊の書物で到達できるものでは決してないことは言うまでもない。しかしながら、中東・イスラーム世界を異文化として捉える平坦な切り口に対して、なんらかの概念的枠組みを指定する必要性があると考えたのが、本書を編む契機となった。つまり本書は、中東・イスラーム世界における「異」文化を理解することを目的とするのではなく、共同体形成における思想の役割と、その思想がいかなる社会的要因のなかから抽出されてくるのかという、きわめて普遍的な問題を、中東・イスラーム世界の事例において観ようとしたのである。

本書は、6章から成り立っているが、うち5章はアジア経済研究所1999年度三地域等総合研究事業「イスラームと民族主義」研究会の成果として執筆された論文である。残る1章は、同じく三地域等総合研究事業として実施されたシリアにおける海外研究会の成果の一部を、大幅に改稿したものである。いずれも上にあげた主旨の問題意識のもとで、それぞれの研究対象地域、お

よび研究分野での宗教とナショナリズムの関係を論じたものである。

以下、簡単に本書の構成をみておきたい。

まず第1章「宗教とナショナリズム概論」(酒井論文)は、本書の「宗教とナショナリズム」という壮大なテーマに取り掛かるにあたって、あえて一般論としての宗教・ナショナリズム関係の枠組み設定を行おうと試みた概論である。筆者がそのような概論をまとめるにはあまりにも浅学であり無謀な試みであることは、十分承知のうえである。それでもなお、こうした一章を立てようとしたのは、宗教・ナショナリズム関係の議論がともすれば個々別々の議論に終始し、複数の論文を編んでも個別事例の単純な比較論に陥ってしまうことを危惧したためである。よってここでは、宗教とナショナリズムの理念上の相反性、相互依存性をそれぞれまとめたうえで、最近の主要なナショナリズム研究者——とくにアンダーソン、ゲルナー、ホブズボウム、スミスなど——の議論展開を踏まえ、ナショナリズムと宗教復興関係についての独自の仮説を立てた。そこでは信徒共同体の、ナショナリズムの礎型として利用される対象としての側面と、利用されることに反発して「ナショナリズム以外のもの」に集団意識の発露を求める側面という、二通りの現れ方が存在する、と想定する。

ついで第2章「中東・アラブ世界における民族主義と宗教」(同上)は、第1章で仮定した信徒共同体の「ナショナリズムの礎型となるか、宗教復興として発露するか」という二方向性が、アラブ民族主義においてはどのように展開されたか、という点に絞って概観している。第1章同様、アラブ民族主義とイスラームの関係についての概念枠組みを措定するだけの力量もないことは筆者自身がよくわかっているが、これまで、アラブ民族主義諸思想がイスラームをどう理解し、どう位置づけてきたかということを論ずる概説書は、少なくとも邦文においてはあまり多くない。とりわけ、イスラームが多くの点でアラブ民族主義批判・反省のうえに展開されているということを考えると、アラブ民族主義の何がその批判・反省の対象となっているのかを明らかにする必要がある。本章ではそれがアラブ民族主義によるイスラームの

「文化」への矮小化であったことを明らかにし、アラブ民族主義が、アラブであることとイスラームとの不可分性をいかにナショナリズム・イデオロギーのなかで利用してきたかを概観する。

一方、イスラームの政治化という現象をどのように了解するかという認識枠組みに関して、第3章「イスラーム世界における政-教関係の二つの次元」(池内論文)は、通説で主張されるイスラームの政教不可分性を批判的に論ずることから始める。近年のイスラーム研究は、西欧型キリスト教的政教二元論をイスラームに当てはめることの問題点を反省し、イスラームにおける政教一元性を前提に議論が進められているが、池内は、こうした分析枠組みが、イスラームの規範のうえでの政-教関係と現実社会における政-教関係を区別していない、と指摘する。そのうえで池内は、政-教関係を、国家-社会関係分析の一部としての次元と、思想と現実政治との関係としての次元とに弁別することが重要とし、前者は政治経済学的手法によって、後者は知識社会学的手法によって分析する必要がある、とする。

まず前者の「国家-社会関係」の次元でみれば、現実の政-教関係は、国家管轄の政治領域と宗教領域が重なりあう部分の拡大・縮小をみることによって捉えることができる。また規範と現実世界の関係においては、ウラマーの規範が現実に対していかなる形で作用したかをみることを肝要とする。ここでは「ウンマ」の秩序がそもそも超越的秩序として位置づけられることが指摘され、その超越的秩序と現世の秩序を媒介するものがウラマーである、とする。ウラマーをこのように位置づけたうえで、池内はウラマーの媒介方法にイデオロギー型とユートピア型を想定するが、スンナ派ウラマーの知的体系はイデオロギー型をとり、主として現存の政治・社会体制を正統化する理論的根拠を提供した、と結論づけている。

さて、第3章までが主として概念化作業に力点をおいて論じたものであるのに対して、第4章以下は実証を主とする個別事例分析となる。

第4章「トルコ共和国成立期の『国民』(millet) 概念に関する一考察」(粕谷論文)は、トルコにおける近代ナショナリズムの生成過程を歴史的に

分析したものであるが、このことは一見アラブ民族主義とイスラームの関係を主たる分析対象としている本書においては異質な印象をあたえるかもしれない。しかしトルコ、とくにムスタファ・ケマル（アタチュルク）初期におけるトルコ・ナショナリズムの成立過程は、アラブ・ナショナリズムの成立過程と一種パラレルな展開をたどるものであり、アラブ民族主義の成立のうえで欠かすことのできない重要な要因である。トルコがいつ、どの時点でオスマン主義から脱してトルコ・ナショナリズムを確立するに至ったか、という疑問は、編者が以前より長く疑問に持ち続けてきた問題意識であったため、あえてここにこの論文を組み込んだ。本章は、国家形成期における国民概念を自明としてとらえるのではなく、その「国民」意識の境界の伸縮や概念上の揺らぎを見て取ることを目的とし、とくにクルド民族などの非トルコ系民族が「国民」としてどのように想定されていたかを分析する。ムスタファ・ケマルがトルコ人とクルド人の不可分性を述べている点など、多くの貴重な史料を基にして、独立戦争期においては新生トルコ国家を支える両輪として把握されていたトルコ民族とクルド民族の共存が、その後徐々にトルコ民族主義に取って代わられていく過程は、興味深い。

第5章「イラク・アラブ民族主義思想における宗派主義とそれへの批判」（酒井論文）は、第4章のムスタファ・ケマル期のトルコ・ナショナリズムの議論を受けて、その「トルコ型ナショナリズム」のありようが如何にアラブ民族主義に反映あるいは影響を与えているかという点について、とくにイラクの事例を取り上げる。まず問題設定としては、「アラブ民族主義が一般的にスンナ派ムスリムの間で受容されるが、シーア派ムスリムの間では否定的、あるいはそれへの反発が強い」とする通説の一面性を批判し、この通説の背後にあるアラブ民族主義のシーア派＝ペルシア人＝非アラブ／反アラブ民族主義、という思考方法の根源を探る。そこでは主として最近のアラブ民族主義者、ハサン・アラウィーの議論に依拠しつつ、アラブ民族主義の父とも呼ばれるサーティウ・フスリーに対するシーア派ナショナリストによる批判を検証する。アラウィーの議論は、フスリーに代表されるアラブ民族

主義者の民族主義思想が西欧近代思想の産物であることを強調して、それがもともとアラブ民族の間に源初的意識として存在していたウルーバとは性質の異なるものとして展開されたこと、そこに見られる一種の派閥主義などのルーツは、ムスタファ・ケマル期のトルコ・ナショナリズムに遡ることができ、イラクの王政期ナショナリスト政治家の多くがトルコ・ナショナリズムの多大な影響下にあったこと、などに集約される。

最後に、第6章『「バアスの精神的父」ザキー・アル=アルスーズイー』（青山論文）は、前章がイラクのアラブ民族主義の諸問題を論じたのに対して、シリアのバアス主義において「真のイデオログ」と位置づけられるザキー・アル=アルスーズイーの生涯と思想内容、さらにはそれがいかに現在のシリア・バアス党のアラブ民族主義政策において政治的に利用されているか、といった点について分析したものである。最初にアルスーズイーの形而上学的な言語観、「ウンマ」や「カウミーヤ」などの基本概念を分析することで思想的全体像を明らかにするが、とくにそれが哲学的側面できわめて深遠な性格をもつ反面、政治的には稚拙ともいえる性質のものであること、アルスーズイーがカウミーヤの意識化という知的側面に力点を置いて、バアスを実現するための手段として文化的任務を優先させるべきであると考えていたこと、に着目する。それがアフラクのバアス主義との最も大きな違いのひとつであり、アフラクはバアス主義が党の政治活動の理論的基礎としてより効果的に機能しうよう、本質論の一切を排除した、と論じる。すなわちアフラクは政治的行動主義のためのイデオロギーとしてバアス主義を位置づけた。こうした相異は、その後の党内路線対立や派閥対立と密接に関連し、アフラクに敵対するアサド政権の支配の正統化のために、結果的にアルスーズイーもまた、アフラク否定のための政治的手段として起用されていく、という過程が分析されている。

以上、今回は六つの論文をひとつの本として取りまとめたのであるが、本書の課題である「民族主義とイスラーム」を包括的に議論するには、実証例

があまりにも少ないことは認めざるをえない。アラブ民族主義思想を全体的に網羅して検証したわけでもないし、またイスラーム復興主義思想もそれぞれの事例をより深く詳細に追う必要がある。今次企画においては、アラブ民族主義のイスラーム改革主義からの分岐を議論するうえで、トルコ民族主義の与えた影響の大きさを考え、とくにアラブとトルコを研究対象とした。しかし一方で、イランにおけるイスラームと民族主義の関係を分析することはきわめて重要であろう。たとえば、タバコ・ボイコット運動などに代表される反植民地主義運動においてウラマーが果たした役割は多大であり、こうした潮流とイラン・ナショナリズムの流れ、さらにはイラン・イスラーム革命の位置づけなど、議論すべきテーマは多々残されている。

また同様に、今回触れることができなかったが重要な研究対象として、バルカン諸国におけるナショナリズム意識と信徒共同体の関係がある。しばしば指摘されるように、ボスニアの「ムスリム人」として認識されている人々の集団は、信徒集団が一種エスニック集団化した典型的な事例として理解されるが、こうしたエスニック化現象がいったいどのような契機で、どのような環境のもとで発生するのか、解明すべき問題であろう。

残念ながら、こうしたテーマは今回の企画では取り上げることができなかった。何よりもまず、冒頭にあげたような問題意識に十分答えられているとは思えない。しかし本書のテーマが無謀なまでに壮大であり、一年の研究会のみで完結できるテーマではないことは、衆目の一致するところであろう。とりあえず、最初の一步として本書を試論という形で世に問い、そこから始まるさまざまな議論展開を踏まえて、第2、第3の企画に発展させていくことができれば、と考えている。

戦後10年目の再度のバグダード空爆の報を聞きながら

編者